

# 歴史的資産としての キャンパスの樹木

本学のキャンパスには、自然を生かした数多くの樹木が植えられ、珍しいものや興味深い由来を持つものも少なくありません。本学とともに今日まで歩んできたこれらの樹木は、本学の資産ともいえるのではないのでしょうか。ここでは、数あるキャンパスの樹木のなかから、いくつか取り上げてご紹介したいと思います。

## キンモクセイ

お茶の水女子大学名誉教授 清水 碩

東門から延びるイチョウ並木は、目の錯覚によって実際よりもずっと奥行きのあるように思わせ、いつ見ても見事です。そしてこの錯覚を、突当り奥のこんもり濃い緑の葉を付けたキンモクセイが助けています。

このキンモクセイは歌人の尾上八郎（柴舟）教授と、女性理学博士第一号の保井コノ教授によって植えられたとされています。そして都内では珍しがられる大きさまでに育ちましたが、今から20年程前、春先の大雪の重さに耐えかねて縦に裂けてしまいました。無残な姿に変わり果てたキンモクセイを見事に蘇生させたのが、当時の附属学校部職員だった石川克己氏です。同氏は若いキンモクセイを接木することで、傷ついた老木を生き返らせました。近づいて根方を見ると、手術の跡がよくわかります。若い木を古い木の組織が包み込んで一本の木に癒着しています。当時はまだ樹木医という言葉はありませんでしたが、石川氏というすぐれた知識と技能の持ち主によって、大学のシンボルとも云えるキンモクセイが救われたことをここに書いておきたいと思っています。



# 大イチョウ

お茶の水女子大学名誉教授 清水 碩

柵をめぐらせて厳しく守られた附属幼稚園の大イチョウを8年ぶりに訪ねました。前は盛夏で、葉をびっしりと付けてあたりは薄暗く、近寄り難い雰囲気を感じさせましたが、秋が深まりすっかり黄色に色付いた今回は、明るく愛想のよい好々爺を思わせます。根元に置かれたよく使い込まれた遊具も、園児との関係をしのばせてほほえましい。

雌雄二本が揃っていたのが、落雷によって雌木が失われ、揃っていれば天然記念物に指定されていたと惜しむ声を聞いた記憶があります。

幹の直径から樹齢はおよそ300年と推測されます。巨木といわれるものにイチョウが多いのですが、その理由は不明です。樹齢1000年以上の屋久杉の例もあることから、植物にはもともと寿命はないのかも知れません。動物のように動くことのできない植物は、種子の落ちた場所で一生を終えるように定められ、自分の望む場所や条件で生きることが望みません。そして花を付けたり、実を結ぶことを人間に強いられ、さらに戦火までも加わって、短く生を終えていると言えます。そうした束縛を離れ、孤高に生き続けた大イチョウに畏敬と感動を覚えるのも当然かと思えます。



# 椿

佐竹 元吉 (生活環境研究センター教授)  
李 宜融 (生活環境研究センター講師)

キャンパスに咲いている椿が、満開の時期を迎え、爽やかな香を漂わせ美しい花を見せてくれています。日本を代表とする椿の学名は*Camellia japonica*といい、その名前のごとく、日本原産の植物です。また、「椿」という文字の通り、「春の木」です。

椿が花木として鑑賞されるようになったのは、鎌倉時代からです。公卿、僧侶、武士の間に茶道、華道が流行し、多くの大名や寺院が、きれいな品種を育種し、椿が愛用されるようになったようです。元禄時代にカメラアという宣教師が椿の実を持ち帰り、19世紀にはヨーロッパで一大ブームとなり、デュマ・フィスは「椿姫」を書きベルディがオペラに仕立てました。この美しさにヨーロッパの園芸家は日本に飛びつき、多くの品種がベルギーやオランダに渡りました。

なぜ、お茶大のキャンパスに椿が多いかご存知でしょうか。本学の故津山尚教授が学問的な椿の研究を行い、国内の全品種を収集し、「日本の椿」という本を出版した際に、代表的な椿の品種をキャンパスに植えたからです。

